

# 兵庫県の新生児死亡調査よりみた周産期医療事情

研究協力者

竹 峰 久 雄

(兵庫県立こども病院新生児科)

兵庫県は新生児死亡率、周産期死亡率ともに昭和57年度までは全国平均を下廻る成績を示していたが、昭和58年、59年と続いていずれもが全国平均を上廻る状態となった。

この原因検索の一つとして、昭和59年度の兵庫県下の新生児死亡に関する調査を実施した。本調査の新生児死亡者の出生体重は死亡票と出生票のつき合わせにより、県保健環境部健康課の協力を得て調査を行った。

その結果、昭和59年度新生児死亡数254名で、第3次新生児医療施設と推定される病院での新生児死亡者100名(自院出生者23名、他院出生者77名)で全体の39.4%を占め、2次医療機関と目される病院では70名(自院出生者35名、他院出生者35名)で27.6%、その他の病院施設(1次医療機関)は30名(自院出生者27名、他院出生者3名)11.8%、診療所は15名(5.9%)、自宅6名(2.3%)、県外施設での死亡33名(13.0%)であった(表1)。

表1 医療機関別新生児死亡調査

新生児医療機関	自院出生者	他院出生者	計
3次施設	23	77	100(39.4%)
2次施設	35	35	70(27.6%)
その他の病院	27	3	30(11.8%)
診療所	14	1	15(5.9%)
自宅			6(2.3%)
県外			33(13.0%)
計			254(100%)

新生児医療の2次及び3次医療施設では合計170名で、兵庫県新生児死亡のうちの68.0%を占めるに過ぎず、その他の医療施設(主として1次新生児医療機関)が51名(20.1%)を占めたことは大きな問題点として浮び上がった。1次医療機関での新生児死亡が多くみられたことは、まず新生児が十分な新生児医療を受けることなく死亡したことが考えられる。2・3次医療機関に送院できない程急速に病状が悪化したのか、受け入れ病院側に問題があり、送院することができなかったのか、いずれにしても問題は大きい。調査し得た範囲内で、産科診療所での新生児死亡

者15名中6名が1500g未満の極小未熟児だったことは、送院する産科医療機関の未熟児医療に対する姿勢が問題になる一方で、受け入れ病院側も積極的に24時間、365日、未熟児受け入れを考えなければならない。これらのことは1つの病院だけで問題が解決できるとは考えられず、県全体が新生児緊急医療システムとして稼働してゆく必要がある。

出生体重別に新生児死亡(0~27日)実数を調べると、第1位が成熟児(2500g以上)の86名、ついで超未熟児(1000g未満)の72名となる(表2)。新生児死亡のなかで超未熟児死亡の比率

表2 出生体重別新生児死亡数

499g	4
500g~999g	68
1000g~1499g	44
1500g~1999g	26
2000g~2499g	25
2500g~	86
計	253

(※ 1名出生体重不詳)

が極めて高いことが判明した。昭和59年度兵庫県は超未熟児出生数は110人で出生頻度は出生千対比で1.72となる。同じ様に全国平均では超未熟児の出生頻度は1.45であるから、兵庫県では超未熟児の出生頻度が高い。超未熟児の出生に関しては、生産とするか死産とするか、他の出生体重以上にその判定が恣意的となる傾向が強い。昭和59年度の都道府県別の超未熟児の出生頻度を調べると、0.46から2.32までと大きな巾が認められることもこれを裏付けている。

出生体重別新生児死亡率(0~27日)を調査した。昭和55年度にも兵庫県では標準化新生児死亡率という目的のため調査したデータがある。これと比較した(表3)。全体の新生児死亡率をはじめとし、

表3 新生児死亡率、昭和55年と59年との比較

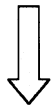
	昭和55年	昭和59年
~ 999g	625	655
1000~1499g	313	212
1500~1999g	73.8	48.3
2000~2499g	11.6	9.3
全 体	4.7	3.9

1000～1499g群、1500～1999g群、2000～2499g群はいずれも新生児死亡率は大巾な改善が認められているが、1000g未満群は逆に増加している。超未熟児群の死亡率が改善されないばかりか上昇しているのである。この原因の一つとして昭和55年度の超未熟児出生頻度は出生千対比で1.16であったものが、昭和59年は1.72と上昇している。即ち超未熟児として生産あつかい（死産としなかった）例が増加している点が挙げられる。昭和59年度は500g未満児が4例も含まれていることもこの辺りの事情を物語っていると考えられる。この様な超未熟児出生の増大が原因の一つとなっているとは考えられるが、尚一層の超未熟児の医療成績の向上を計らなければ、兵庫県新生児死亡率の改善も期待できない。

## ま と め

昭和59年度兵庫県新生児死亡に関する調査を行った結果

1. 新生児2次・3次医療機関での死亡者は、全体の68.0%に過ぎなかった。
2. 1次医療機関で死亡した児に極小未熟児がかなり含まれていた。産科医療機関の未熟児医療に対する姿勢、及び産科と小児科受け入れ機関とのより有機的な結びつきが重要と考えられた。
3. 新生児死亡のなかで超未熟児（1000g未満）の占める割合が高い。兵庫県では超未熟児出生頻度が全国平均より高い。昭和55年度の兵庫県のデータと比較しても、59年度は高くなっている。これらのことも影響して超未熟児の新生児死亡は昭和55年より増大している。超未熟児医療の一層の向上が望まれる。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



兵庫県は新生児死亡率、周産期死亡率ともに昭和 57 年度までは全国平均を下回る成績を示していたが、昭和 58 年、59 年と続いていづれもが全国平均を上回る状態となった。

この原因検索の一つとして、昭和 59 年度の兵庫県下の新生児死亡に関する調査を実施した。本調査の新生児死亡者の出生体重は死亡票と出生票のつき合わせにより、県保健環境部健康課の協力を得て調査を行った。

その結果、昭和 59 年度新生児死亡数 254 名で、第 3 次新生児医療施設と推定される病院での新生児死亡者 100 名(自院出生者 23 名、他院出生者 77 名)で全体の 39.4%を占め、2 次医療機関と目される病院では 70 名(自院出生者 35 名、他院出生者 35 名)で 27.6%、その他の病院施設(1 次医療機関)は 30 名(自院出生者 27 名、他院出生者 3 名)11.8%、診療所は 15 名(5.9%)、自宅 6 名(2.3%)、県外施設での死亡 33 名(13.0%)であった。